

重症結膜炎涙で即判定

佐賀大学医学部の出原賢治

研究は鶴見大学歯学部附属

教授を中心とする研究グループが、微量の涙を用いて重症

病院（神奈川県）の協力を得

のアレルギー性結膜炎を高精度で判定する方法を発見し

て、患者と健常者合計73人分のデータを、佐賀大チームが

た。涙に含まれる特定のタンパク質の量で重症、軽症を数

解析した。研究成果が7日、米国の専門誌「ジャーナル・オブ・アレルギー・アンド・

分で判定し、適切な治療がすぐ

電子版に掲載された。

査薬メーカーと共同で商品化

目のかゆみや充血、腫れが

も進めている。

主な症状のアレルギー性結



膜炎患者は、スギ花粉症の増加により、推計で国内2千万人に上る。ただ、中には

佐賀大医学部グループ発見

特定タンパク質着目

アトピー性皮膚炎に合併して発症するアトピー性角結膜炎（AKC）など最悪の場合、失明の可能性がある重症タイプもあり、早期に症状の程度を見分ける必要があった。

ほとんど検出されなかった。「93%の確率で区別が可能」と結論付けた。研究成果を基にした検査キットは早ければ2、3年で実用化される見通し。血液検査に比べ、採血の痛みを伴わず、その場で診断できる。出原教授は「重症タイプは子どもに多く、初診はかかりつけの小児科というケースも多い。眼科の専門医でも難しい診断が迅速にできるようになれば、早期の治療が期待できる」と意義を説明する。

研究は、アトピー性皮膚炎などで増えるとされるタンパク質のペリオスチンに着目した。涙液中の濃度判定で重症のAKCは極端に高く、青少年に多く見られる中程度の症状の「春季カタル」はやや多かった。花粉による季節性アレルギーは微量で、健常者は

（村上大祐）